研究ノート

表象としての鳥居

――ブラジル・サンパウロを事例に――

加　藤　里　織
KATO Saori
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科非常勤助手
非文字資料研究センター研究協力者

はじめに

2021年1月、ブラジル、サンパウロ人文科学研究所（通称、人文研）が約4年にわたる実態調査をまとめた報告書『多文化社会ブラジルにおける日系社会の実態調査―日系団体の活動状況フィールド調査からその意義と役割を探る』を刊行した。人文研のこの調査は、1980年代を最後に今日まで行われてこなかった全国的な「日系団体」の実地調査として、「あいまいなイメージや“伝説”として語られていた「日系社会」」について、様々な角度から分析を可能にするためのデータバンク作成という目的で行われた。調査は、2016年から2020年12月（調査自体は2016年4月から2018年3月までで、ほかは集計・分析期間）まで行われた。この調査の詳細な内容については本稿では割愛するが、この調査結果を報じた現地邦字新聞によると、ブラジルには鳥居が「150基以上」存在するという（『ニッケイ新聞』2018年12月4日付）[(1)]。

ブラジル国内の鳥居について、同邦字新聞社は2007年頃から独自調査を行っており、2018年4月の時点で「少なくとも「107基」を確認」していたという。それが人文研の調査ではさらに上回る「150基」という数になっていた（『ニッケイ新聞』2021年6月5日付）[(2)]

非文字資料研究センター客員研究員で海外神社研究のためブラジルを調査した前田孝和氏も「世界の中の神社（2）ブラジルに渡って32年で社殿完成 日本の神社界も協力 南米神宮：今年は移住110年の記念の年 海外最大の日系社会 ブラジル」（2018年：13）のなかで、「ブラジルには日本を象徴する鳥居が道路や公園など少なくとも七十基が建立されて」いると述べている[(3)]。『ニッケイ新聞』や前田孝和氏のいうように、ブラジルは「鳥居大国」なのである。「150基以上」存在するというブラジルの鳥居は、誰が、いつ建立したのだろうか。

『神道事典』（國學院大學日本文化研究所、弘文堂、1994年：185 － 187）によると、鳥居とは「神社の神域の入口を示す「門」」とある。また、『日本の神仏の辞典』（大島建彦他編、大修館書店、2001年：925）では、鳥居は「神社において聖域と俗界を画する関門として参道入口や社殿周囲の玉垣などに建てられたもの」とある。さらに神社本庁によると、鳥居とは「神社を表示し、また神社の神聖さを象徴する建造物」であり、「神社の内と外を分ける境に立てられ、鳥居の内は神様がお鎮まりになる御神域」なのである。また一部の特定の神殿（本殿）を持たない神社では、鳥居が「神様の御存在を現すもの」として用いられていることもあるという。現在では、一般的に地図記号をはじめ神社を象徴するものとして捉えられているが、明治初年における神仏分離令によって禁じられる以前は仏教寺院などで用いられることもあり、墓地などでは「結界」の象徴とされてきた歴史もある[(4)]。

日本人の海外移住や日本の植民地支配に伴い、海外各地に多くの神社が創建された。日本において「神社」は、明治政府の神道国教化政策のもと帝国の神紀を奉祀し、公の祭典を執行し、公衆参拝の用に供する設備であった。海外に創建された神社は「海外神社」と呼ばれ、ほとんどすべてが明治期以降創設されたもので

ある。神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターの第五期共同研究「「帝国日本」境界の祭祀再編と海外神社（通称、神社班）」では、この海外神社とその付属施設について研究を行っている。[5]

2020年度から同班で研究協力者として参加をしている筆者は、2014年からブラジルでフィールドワークを行ってきた。そのなかで、日本の鳥居が「日本」「日系」を表すシンボルとして、非常にユニークに捉えられ描かれている場面を目にすることがあった。

本稿では、日本の象徴である鳥居が、ブラジル社会で実際にどのように捉えられているのかについてその一端を紹介したい。

I　ブラジル日本移民史概要

日本人のブラジルへの集団移民は1908年に始まる。初期の移民はサンパウロ州のコーヒー農場へ一定期間就労するという雇用契約移民であった。しかし、不慣れな労働や不作、過酷な労働などにより、契約満了を待たずに農場から逃げ出すものもいた。1918年に海外興業株式会社が設立され、1924年には「アリアンサ移住地（Colónia Aliança）」も建設された。日本政府による渡航費用の支給などが行われるようになり、移民の大量送り出し時代が始まった。移民政策が活発になった1930年代前半には年間2万人を超える移民がブラジルを目指した。アジア・太平洋戦争で一時期、日本からの移民は中断したが、1952年に移民が再開されると、アマゾン地域やマット・グロッソ（Mato Grosso）州など移住先が多様化した。しかし戦後の復興と共に日本経済が発展すると、1964年には年間移住者数が1千人を下回るようになり、1993年に日本政府による移住者送り出し事業は事実上終了となった。[6]

このような日本移民の歴史を持つブラジルで、鳥居はいつ頃から建立されたのだろうか。

前田孝和氏によると、戦前、日本政府は「日系社会はカトリック教国ブラジルへの同化政策に反するとして、日本宗教、特に仏教と神道の進出に反対」したという。当時の邦字新聞紙でもブラジルでの布教と寺院建設などに対して厳しい批判記事が掲載されるなど、排他的なコミュニティを形成する傾向にあった日系社会に対し、移民の同化政策を推し進めるブラジル政府は「社会のキスト〈癌〉」と見られていることを問題視していた。[7]このような状況のなかで、積極的な神社創建は進められず、結局、戦前にブラジルで創建されたのは、「東京植民地神宮」「ブグレ神社」「蚕祖神社」など数社に留まっている。[8]

戦後、日本からの移民が再開されると、日本宗教の活動も活発化するようになった。神社創建の動きも具体的に見られるようになり、次々と創建されるようになった。現在では、「南米神宮（Templo Xintoïsta do Brasil）」「ブラジル石鎚神社」「ブラジル熊野神社」「金比羅神社」「パラナ州開拓神社（Kaitaku Jinja em Rolânadia, Paraná）」「パウリスタ神社（Paulista Jinja）」など各地に神社がある。

先にも述べたように、『ニッケイ新聞』では2007年頃から独自調査を行い、2009年6月18日にはブラジル全土に鳥居が68基以上存在することを報じている。同紙が同年3月10日付で報じた際には、ブラジル全土で判明していた鳥居の数は46基であったが、その後読者からの情報提供などを通じて68基の存在を明らかにした（同年6月18日時点）。この68基の鳥居は、その過半数がサンパウロ州内に建てられているものであり、次にパラナ州に13基、そしてブラジリアやミナス・ジェライス（Minas Gerais）州などにも存在しており、「日系人集住地区には欠かせないシンボルとなりつつある」という。最も古い鳥居は1950年頃にサンパウロ州サント・アンドレー（Santo André）市の「日本荘」に建立されたもので、後に「日本カントリー・クラブ」に移築されたという。その後、1973年にバウルー（Bauru）市に「パウリスタ神社」が創建された際に鳥居も一緒に建立され、これ以降に建てられた鳥居は、基本的には「社」や「祠」と一緒に建立されるなど、「宗教色」を持つものであった。このように68基の鳥居は、1950～70年代に建てられたものは神社に併設されるなど、宗教的意味合いを持つものであったが、1974年にリベルダーデ地区のガルヴォン・ブエノ通りに建てられた鳥居は、「社なき鳥居」として「日系のシンボル」というイメージづくりに一役買うものとなった。同紙が報じた68基の鳥居のうち35基は、2008年の日本移民100周年の際

に建てられた新しい鳥居であり、2000年以降に鳥居の「建設ラッシュ」があったと記されている。そして2017年4月には、少なくとも「107基」の鳥居を確認していたという。

II 「日本移民顕彰」としての鳥居

ブラジルで建てられた鳥居の多くが戦後1950年代以降に建てられたものであり、そのほとんどは1978年の「日本移民70周年」と2008年の「日本移民100周年」を記念して建てられたものであった。特に2008年には、ブラジル各地で「爆発的」な鳥居建設ラッシュという状況であった。『ニッケイ新聞』の2008年の調査によると、サンパウロ州ではスザノ（Suzano）市やカンピーナス（Campìnas）市の文化協会の入り口に、イタペチニンガ（Itapetininga）市やモジ・ダス・クルーゼス市（Mogi das Cruzes）では「日本移民広場（公園）」に、またブラジリアの西本願寺やアマゾナス（Amazonas）州マナウス（Manaus）市のエドゥアルド・ゴメス・マナウス（Aeroporto International de Manaus-Eduardo Gomes）国際空港やミナス・ジェライス州の日本庭園など各地に鳥居が建てられた。[(9)] このように街のなかで「日本移民顕彰」の一環として建てられた鳥居は、次のようなものが挙げられる。

旧桂植民地（現イグアッペ（Iguape）市）はサンパウロ市から南西約160kmに位置し、1913年から日本移民の入植が行われてきた土地である。レジストロ（Registro）は1916年から、セッテ・バラス（Sete Barras）は1920年から、ミランドポリス（Mirandópolis）は1924年から入植が行われてきた。いずれも戦前から日本移民を受け入れてきた土地である。このような日本移民と深い繋がりのある土地では、広場や公園などで鳥居を目にすることができる。

写真1 「イグアッペ（旧桂植民地）の公園に建てられた鳥居」額束の部分に「桂」の文字が見える。
（2016年11月3日、筆者撮影）

写真2 「レジストロ市リベイラ河ほとりに建てられた鳥居」
（2016年11月1日、筆者撮影）

写真3 「セッテ・バラスの「プラッサ・ダ・コロニア・ジャポネーズ」に建てられた鳥居」（2016年11月3日、筆者撮影）

写真4 「ミランドポリスの「第三アリアンサ移住地」に建てられた鳥居」（2016年10月30日、筆者撮影）

III　表象としての鳥居

ブラジルでは、鳥居はどのように位置づけられているのだろうか。ブラジルの日系出版社「JBC」のホームページ「Made in Japan」では、日本の鳥居について次のような紹介をしている。

「*Torii, um dos símbolos do Japão*」

O torii é um dos elementos mais reconhecidos quando se fala em Japão. É uma construção típica do xintoísmo, a religião nativa do país, e representa a entrada em território considerado sagrado.

Quando feito de madeira, o portal geralmente é pintado de vermelho – segundo a tradição japonesa, tal cor tem o poder de espantar doenças. Existem torii feitos de pedra, bronze e outros materiais também.

（訳）日本の象徴である「鳥居」

鳥居は、日本を語る上で最も認識される要素の一つです。日本の固有の宗教である神道の代表的な建造物であり、神聖な領域への入り口を表しています。木造の場合は、門扉は日本の伝統に則り赤く塗られていることが多いのですが、この色には病気を追い払う力があると考えられています。ほかにも、石やブロンズなどの素材を使った鳥居もあります。

このように、鳥居は日本を語る上で「最も認識される要素の一つ」として、「神聖な領域への入り口」であることや赤い色には「病気を追い払う力」を持つものであることが紹介されている。そしてこのホームページでは、三つの鳥居が写真付きで紹介されている。その三つとは、(1) Um dos torii do santuário xintoísta Kasuga Taisha, na província de Nara（春日大社の大鳥居）、(2) Torii no bairro da Liberdade, em São Paulo（サンパウロ、リベルダーデ地区の鳥居）、(3) O torii de Omiya Jinjya, na cidade de Sakurai, tem 32 metros de altura（奈良県桜井市三輪にある大宮神社の 32 メートルの大鳥居）である。

ここで紹介されているリベルダーデ地区にある鳥居は、ブラジルで最も知られている鳥居であり、東洋街のシンボル的存在である。次に、奈良の春日大社と大宮神社にある大鳥居が紹介されている。

写真 5 「リベルダーデ（ガルヴォン・ブエノ通り）の大阪橋にかかる鳥居」(2020 年 1 月 26 日、筆者撮影)

「JBC」は、ブラジルと日本を繋ぐため、ブラジルに日本文化を広めるために 1992 年に創業した会社である。現在はマンガを中心に出版活動を行っている。マウリシオ・デ・ソウザ（Mauricio de Sousa）氏はサンパウロ生まれのブラジルを代表するマンガ家だが、同社が出版した作品「ブラジルと日本 110 年の友情／110 anos de Amizade entre Brasil e Japão」はブラジルと日本友好 110 年の歴史と、1980 年代以降来日するブラジル人の歴史を紹介しており、その表紙と本文で鳥居が描かれている。

マウリシオ氏の作品に見られるように、鳥居は「日本を語る上で最も認識される要素の一つ」としてブラジルでは認識されている。サンパウロの東洋人街では、あちらこちらで鳥居が描かれた建造物を見ることができる。

写真 6 「ブラジルと日本 110 年の友情／110 anos de Amizade entre Brasil e Japão」表紙（筆者手元資料）

写真 7 「リベルダーデのショッピングセンター」
（2020 年 2 月 14 日、筆者撮影）

写真 8 「リベルダーデの日本庭園のマークに描かれた鳥居」
（2020 年 2 月 14 日、筆者撮影）

写真 9 「青葉祭り会場内にインテリアとして建てられた鳥居」
（2014 年 10 月 6 日、筆者撮影）

写真 10 「リベルダーデの空手道場入り口」
（2020 年 2 月 14 日、筆者撮影）

東洋人街の中心広場に面したショッピングセンターの建物は鳥居のようなデザインが用いられており、ここを訪れた人々が「日本」らしさを感じるような外観となっている。また、東洋人街中ほどにある「日本庭園」の入り口は、日本庭園のシンボルマークとして「鳥居」「提灯」「欄干」が描かれており、ここも「日本」らしさを表現したデザインとなっている。(10) この東洋人街には「会館」と呼ばれる建物が集まっているが、その一つ宮城県人会会館では毎月二回（第一・三土曜日）に「青葉祭り」と呼ばれる市（いち）が開かれ、日系人農家が栽培した蔬菜類や日系団体が作ったお弁当や総菜、和菓子などが販売され、日系のみならず現地ブラジル人にも人気の市となっている。この「青葉祭り」には「氏」から家紋を調べる「家紋調べ」なども行われており、若い日系人の人気を集めている。この青葉祭りの会場内には鳥居がインテリアとして飾られており、「日本」らしさをより強める演出がされている。また東洋人街にある空手道場では、その入り口に鳥居が用いられている。

このような「インテリアとしての鳥居」は、他の場所でも目にすることができる。レジストロの街では毎年 11 月上旬に「灯籠流し」が開催される。この「灯籠流し」は 2 日間で約 2 万人が参加するレジストロ最大の日系祭りである。会場はリベイラ河（Rio Ribeira

de Iguape）のほとりにつくられ、「慰霊祭」のあとは「ボンダンス（盆踊り）」や「エイサー太鼓」など様々な催しが行われる。会場内には日本雑貨の販売やレストランなども設置され、日本を味わうことができる。この日本食レストランの一つでは、店のインテリアとして鳥居を使って「日本」らしさを演出していた。

写真 11 「「灯籠流し」会場内のレストランでインテリアとして用いられている鳥居」（2016 年 11 月 2 日、筆者撮影）

また、会館の入り口に鳥居のようなデザインを取り入れている会館もある。サンパウロ東部に位置するヴィラ・カホン（Vìla Carrâo）地区にある沖縄県人会は、その会館の外観に鳥居のようなデザインを取り入れている。

写真 12 「ヴィラ・カホン地区の沖縄県人会会館」（2020 年 1 月 31 日、筆者撮影）

鳥居はこのように日本人が多く集まる場所で、日本を表象するものとして用いられているが、個人宅のような場所でも建てられている。次の写真はリオデジャネイロの個人宅（戦後 1950 年代後半移住者）の入り口には鳥居が建てられており、門として使われている。

このような鳥居は、土産用の葉書にも使われ、東洋人街で販売され、ブラジル人に「日本」を伝えている。

写真 13 「個人宅の門として用いられている鳥居」（2015 年 5 月 27 日、筆者撮影）

写真 14 「リベルダーデで売られている土産用の葉書」（筆者手元資料）

1998 年「日本移民 90 周年」の年、ブラジルで最大の祭りであるサンバカーニバルでは、いくつかのサンバチームが「日本」をテーマにしてパレードを行った。サンパウロのサンバチーム VAI-VAI（ヴァイ-ヴァイ）では、「Banzai! Vai Vai（バンザイ！ヴァイ-ヴァイ）」と題して日本移民をテーマにし、サンパウロ在住の日本人もサンバカーニバルに参加した。その際にチームで作成された T シャツには、日本をイメージするものの一つとして鳥居が描かれている。

ブラジルを代表する文化の一つであるサンバカーニバルでは、周年祭など節目の年には「日本」がテーマに取り上げられることがある。周年祭などの節目の年ではなくても、テーマのなかで「日本」を取り入れることがあると、「日本」をイメージした山車などがつくられる。サンパウロのサンバチームアカデミコス・ド・タトゥアペ（以下、タトゥアペ。ACADÊMICOS DO TATUAPÉ）では、2020 年に日本移民をテーマにした山車をつくりパレード会場を練り歩いた。

写真 15 「1998 年の「日本移民 90 周年」で作成されたサンバチームの T シャツ」右下部分に鳥居が描かれている。（筆者手元資料）

写真 16 「「日本移民」をテーマに作成されたサンバカーニバルの山車」（出典「ACADÊMICOS DO TATUAPÉ」）

タトゥアペが山車のテーマに取り上げたのはサンパウロ北部に位置するアチバイア（Atibaia）の日本移民である。アチバイアはサンパウロから北に 60km ほどの位置にあり、明治期には日本移民が入植し、現在も「日本文化」が非常に強く残る地域である。主要産業は農業で、日系農家によっていちごや栗がつくられている。タトゥアペの山車は歌舞伎、芸者、大仏など日本的なもので彩られ、中央部分に鳥居が据えられている。

また、別のサンバチームでも日本移民をイメージして作られた衣装では、鳥居がデザインとして用いられていた。

このようにブラジルのサンバの世界では、日本の表象として主に鳥居が用いられてきた。特に日本移民の周年祭など、節目の年は「日本」がテーマとして取り上げられてきたが、近年では周年祭などにかかわらず

写真 17 「「日本」をテーマに作成されたサンバカーニバルの衣装」（2018 年 2 月 10 日、筆者撮影）

鳥居を用いている事例が、日系人が多く集住する地域のサンバチームで見られる。次の写真はリベルダーデにあるサンバチームのポスターだが、メインテーマであるアフリカから連れてこられた奴隷の解放の様子の後に東洋街を象徴する「ドラゴン」と「鳥居」がチームの所在地であるリベルダーデを表象するものとして用いられている。

写真 18 「日系人集住地区のサンバチームポスター」（出典「GRCBES Brinco Da Marquesa」）

おわりに

以上、本小論では、ブラジルにおいて「鳥居」が日系だけでなく日本そのものを表すシンボルとして用いられている事例を取り上げた。

最大の日系コミュニティを持つブラジルでは、戦前期に神社創設の動きもあったが、移民の同化政策に支障をきたすという理由でその創設計画が中止となった。しかし戦後、宗教の自由が保障されると、日本から様々な宗教がブラジルへと渡り、神社神道系の団体も活動を行うようになった。一方で、宗教とは全く異なるところから、神社の付属施設である鳥居が、日本・日系のシンボルとしてブラジル全土に建設されるようになった。

根川幸男「ブラジル近現代史の中の「日本文化」表象」によると、戦前期は閉鎖的なコミュニティを形成していた日本移民はブラジル社会では「キスト〈癌〉」として「負」の位置づけにあり「日本文化」を自発的に表象できる社会状況ではなかった。しかし1954年のサンパウロ市400年祭を転換点とし肯定的に捉えられるようになると日系コミュニティの「ウチからソト」へと表象されるようになった。1960年代以降には戦後移民の増加や日本企業の進出、また日系住民の都市化・社会的上昇による職業の多様化により、「日本文化」表象も多様化した。サンパウロの東洋街では、「四つの新伝統行事」が生まれたが、これは「日系コミュニティ内部（ウチ）では、準拠集団である母国日本や母県の「伝統」を参照しながら、都市化した日系住民たちが現在の自分たちのいる場所に意味を与えていく「日本文化」の再解釈の結果」だったのだという。この過程において外部（ソト）からのまなざし（異文化表象としての「日本文化」）にならされ、そのまなざしとの拮抗・交渉の結果として、これら新伝統行事が生み出されたという（根川2009a：66 － 73）。

1990年代以降になるとさらにその表象は多様化し、非日系ブラジル人の間にもサブカルチャーを含む「日本文化」の受容層が拡大した。また日系コミュニティ内での世代交代も進み、「日本文化」から「日系文化」として「多文化的な「ブラジル文化」を構成する一要素として位置づけられる」ものとして捉えられるようになった。このような「日本文化」のブラジル的解釈としての「日系文化」には、HAIKAI(俳諧)・BONSAI(盆栽)・マツリダンス（リズミカルな盆踊り）などが挙げられるが、ここに「表象としての鳥居」も含まれるのではないだろうか。

ブラジルの鳥居は、公式に確認されたものだけで150基にものぼり、まさに「鳥居大国ブラジル」である。そのブラジルにおいて、ブラジル人がどのように鳥居を捉えているのか、またこのようなブラジル人の捉え方に対して、現地の日本人はどのように受け止めているのかを考えることは、「日本文化」やひいては「日本」を考察する重要な視点となると考えられてきた。植民地的支配の及ばなかったブラジルにおいて、鳥居や神社がどのような意味合いを持つのか、今一度考える必要があるのではないだろうか。

注

(1)『ニッケイ新聞』によるとブラジルの鳥居の数は「150基以上」と報告されていたが、サンパウロ人文科学研究所『多文化社会ブラジルにおける日系社会の実態調査―日系団体の活動状況フィールド調査からその意義と役割を探る』（サンパウロ人文科学研究所2021年:）では鳥居の数は「78ヶ所」とあり、「150基以上」の記述は見られない。しかし「これだけの記念碑があるという予想はしていなかったので、調査の途中から詳しく聞き取りを始めたため、一部データが正確でない可能性がある」とあるように、調査の途中から「判明したもの」が「78ヶ所」であり、調査者の「予測」として「150基以上」という報告が現地ブラジルで行われた調査報告会（2018年11月28日）の際にされたと思われる。正確な数は今後の調査に委ねるとして、現在判明しているだけでも「78」基もの鳥居が存在するブラジルは、「鳥居大国」であることに間違いはないだろう。

(2)『ニッケイ新聞』では「知られざる鳥居大国ブラジル」と題して、2009年時点でブラジル全土に68基以上の鳥居が存在することを報じている（2009年6月18日付）。

(3) 前田孝和2018「世界の中の神社（2）　ブラジルに渡って32年で社殿完成 日本の神社界も協力 南米神宮：今年は移住110年の記念の年 海外最大の日系社会 ブラジル」『神社発信 ＝ Jinja journal：神社と神社、神社と世界を結ぶ』13頁、ギャラリーステーション

(4) 根岸栄隆『鳥居の研究』（厚生閣、1943年:360-368）

では仏教寺院の鳥居として、大阪の天王寺や東京の浅草寺内不動堂、不忍池の弁財天などが紹介されている。他にも東京都の青山霊園にある大久保利通の墓所などもよく知られている。一方で、埼玉県さいたま市浦和区にある調神社（つきじんじゃ）のように鳥居を持たない神社も存在する。

(5) 帝国日本の植民地支配と人の移動により、海外神社はアジアを中心に 1600 余社もの神社が創設された。非文字資料研究センターの第五期（2020 − 2022 年度）共同研究「「帝国日本」境界の祭祀再編と海外神社（通称、神社班）」では、神奈川大学 21 世紀 COE プログラムの共同研究（第 3 班・課題 3）として構築、公開された「海外神社（跡地）調査データベース」を引き継ぎ増補改訂を行っているほか、第二期（2011−2013 年度）以降の海外神社研究の視点と成果を受け継ぎながら、「帝国日本」における神社や祭祀空間、祭祀再編の持っている意味について研究を行っている。

(6)「移民」と「移住」の言葉の違いについては、言葉の持つ意味合いはどちらも同じ対象である「仕事を求めて海外へ渡る人（こと）」を指しているが、使われた時代が異なる。「移民」は日本人が国外への移動を始めた初期に一般的に使われていたが、「移民」が「棄民」と呼ばれるようになると、その言葉から受ける印象が好ましくないとして、政策上「移住」と言い換えるようになった。大まかには戦前期は「移民」、戦後期は「移住」と一般的に用いている。

(7) 根川幸男 2009「ブラジル近現代史の中の「日本文化」」白幡洋三郎他編『創立 20 周年記念国際シンポジウム日本文化研究の過去・現在・未来 ―新たな地平を開くために―』32 集 :67、国際日本文化研究センター

(8) 注(3)前田　前掲論文 14 頁

(9) 注(2)前掲紙「全伯に散らばる鳥居の一覧表」参照

(10) リベルダーデは「提灯」を模した街灯や、日本的なデザインで装飾された「欄干」が立ち並び、日本的・東洋的な景観づくりが施されており、特に「提灯」は鳥居の次に日本を表象するものとなっている。

参考文献

藤本頼生編 2019『鳥居大図鑑』グラフィック社

深沢正雪 2015「33 カ国リレー通信 (第 30 回) ブラジル 知られざる「鳥居大国ブラジル」」『ラテンアメリカ時報』58(2): 40-42, ラテン・アメリカ協会

國學院大學日本文化研究所 1994『神道事典』弘文堂

前田孝和 2018「世界の中の神社（2）　ブラジルに渡って 32 年で社殿完成 日本の神社界も協力 南米神宮：今年は移住 110 年の記念の年 海外最大の日系社会ブラジル」『神社発信 ＝ Jinja journal：神社と神社、神社と世界を結ぶ』12-16 ギャラリーステーション

根川幸男 2009 a「ブラジル近現代の中の「日本文化」表象」白幡洋三郎他編『創立 20 周年記念国際シンポジウム日本文化研究の過去・現在・未来 ―新たな地平を開くために―』32 集 : 65-76、国際日本文化研究センター

根川幸男 2009 b「忘れられた日系人―民俗学のフィールドとしてのブラジル日系社会―」『現代民俗学研究』1 号 : 65-77、現代民俗学会

根岸栄隆 1943『鳥居の研究』厚生閣

大島建彦他編 2001『日本の神仏の辞典』大修館書店

サンパウロ人文科学研究所 2021『多文化社会ブラジルにおける日系社会の実態調査―日系団体の活動状況フィールド調査からその意義と役割を探る』サンパウロ人文科学研究所

『ニッケイ新聞』2009 年 6 月 18 日、2021 年 6 月 5 日

神社本庁ホームページ：(https://www.jinjahoncho.or.jp/ 最終閲覧 2021 年 9 月 30 日)

日系出版社「JBC」：(https://madeinjapan.com.br/2011/ 05/24/torii-um-dos-simbolos-do-japao/　最終閲覧 2021 年 9 月 30 日)

ACADÊMICOS DO TATUAPÉ:(https://www.academicosdotatuape.com.br/　最終閲覧 2021 年 11 月 15 日)

GRCBES Brinco Da Marquesa: (https://brincodamarquesa.negocio.site/　最終閲覧 2021 年 11 月 15 日)